建築学教室創立 100 周年記念事業報告（５）記念シンポジウム
歴史の中の京大建築・社会の中の京大建築　～世代を繋ぐリレートーク

聲高　裕治

本シンポジウムでは、世代と分野が異なるパネリストをお招きし、これまでの歴史を顧みながら、建築学教室および京大建築会の役割を語っていただき、将来の更なる発展を考える機会として企画しました。

京都大学で先達（恩師、先輩）からどのようなことを学び、受け継いだのか。それを自分の中でどのように展開、発展させてきたのか。さらには、後人（後輩、教え子）にどのように伝えてきたのか。これらの内容を、各分野のパネリストにお話しいただくことにしました。その結果、京大建築が 100 年で作り上げてきたこと、次の世代に繋いでいきたいことをあぶり出すことにしました。本会報にはその要約を示します。

日時：2021(令和3)年8月28日（土）
16:00～18:10
場所：京都大学百周年時計台記念館・
国際交流ホール／オンライン
パネリスト（敬称略）：
西川 幸治（京都大学名誉教授、昭和29）
竹脇　出（京都大学教授、昭和55）
永田 久子（東畑建築事務所、昭和63）
吉田　純（京都市東京事務所、平成7）
大西 麻貴（大西麻貴＋百田有希／o+h、平成18）
司会：
聲高 裕治（京都大学教授）

なお、本シンポジウムは、パネリスト 5 名、司会、一部のコメンテータは百周年時計台記念館に参集して実施しました。その他の方々はオンライン（Zoom）でのご参加でした。

１．移動からみた住まい・都市

年長の名誉教授である西川幸治先生より、アフガニスタン・モンゴル・中国での調査・研究に基づいて「移動からみた住まい・都市」というタイトルでご講演を賜りました。

［要旨］

◆アフガニスタンの遊牧民と定着民

コロナ禍で移動の自粛や制限を受けて、移動について見直す機会を得ました。人類の歴史の中で移動について考えてみますと、狩猟と採取の生活から始まりました。これらはいずれも移動しなければできないことです。その後、野生動物の家畜化や野生植物の栽培が行われるようになりました。家畜と共に移動しながら生活することによって遊牧民がうまれ、農耕によって定着民がうまれていったわけです。

1960 年代におけるアフガニスタンでの調査で、遊牧民について印象深いことが 2 つありました。1 つは、アフガニスタンからパキスタンに向かうカイバル峠のトルハム国境で、遊牧民たちは通関の手続なしに自由に国境を越えていたことです。もう 1 つは、アフガニスタンの北オクサス河畔の住人に、首都のカブールについて尋ねたところ、「カブールに住んでいる人たちは定着民で、自分たち遊牧民とは違う。カブールは我々から見ると異国だ。」という回答をもらい、遊牧民の誇りや心意気を感じたことです。

◆モンゴルのラマ教寺院の衰退と復活

1971 年と 1973 年に、モンゴルのアマルバヤスガランにあるラマ教の寺院の調査に参加しました。この寺院は清朝の勅建で、広大な伽藍を持っていました。当時、モンゴルは社会主義国になったことで、ラマ教の寺院の管理を行わなくなり、かなり損傷が進んだ状態でした。モンゴル草原からラマ教寺院が消えていく感覚を覚えました。

ところが、1980 年代の半ばに政変が起こり、ラマ教を重んじるようになり、寺院の修復が行われるようになりました。消えかけていたラマ教の寺院が雨後の筍のように復活している状態でした。

また、首都のウランバートルでは、1970 年代に高層のアパートはあっても、人々は草原に建つゲルを好んで住んでいましたが、1990 年代には高層ビルが林立している状態でした。

◆中国の城郭

1975 年に西安を訪問した際に、西安の羅城や万里の長城を見学しました。中国では、都市に住む人を城郭の民、遊牧民たちを行国の民と呼んでいます。わたしは当初、生活スタイルのまったく異なる 2 つの世界を、羅城や万里の長城で分離しているのだと考えました。ところが、この考えは 2019 年に西安を再訪した際に改める必要があることを認識させられました。羅城を良く眺めてみると、中国の都市は城塞化しながらも、門を開いて外の世界との交流を行っているのだということを初めて知りました。

また、長安から西に延びるシルクロードでは、砂漠や草原の中のオアシスにキャラバン・シティが点在しています。オアシスを離れると、人々の居住を拒否する世界が拡がっています。一般的な都市は定着民によって作られ、拡大していくことを前提としていますが、オアシスの都市は限定された範囲に存在し、それをシルクロードが繋いでいます。これらを総合しないと、ユーラシア大陸の都市の展開や発展は理解できないのではないかと考えています。

◆京都大学の関係する調査・研究の伝統

戦時中、海外調査が非常に困難な時代において、以下のような調査が行われました。

・水野、長広［人文研］：仏教石窟寺院調査（雲岡石窟、龍門石窟、響堂山石窟）
・今西、石田、藤枝、中尾、和崎、梅棹［西北研究所］
・長尾雅人：蒙古学問寺調査
・村田治郎：東洋建築系統史論（1931）
・村田治郎、鈴木義孝：居庸関（1957）
・京大カラコルム・ヒンドゥクシュ学術調査隊（木原均隊長、1955）
・京大イラン、アフガニスタン、パキスタン学術調査隊（水野清一隊長、1959）

最後に、中東の平和・安定を希って調査再開の日を待ちたいと思います。

２．先輩から受け継いだこととこれからの京大建築に期待すること

現役教授を代表して最年長の竹脇出先生に、先輩から受け継いだこと、ならびにこれからの京大建築に期待することについてご講演いただきました。

［要旨］

◆先輩の先生方から受け継いだもの、京大建築の根本を成す哲学は？

先輩の先生方からは、国際標準で認知された研究を実践するように教えられました。その際、国際学術誌で研究発表を行うことが大切ですが、単に研究発表だけでは意味がありません。h-index という指標で表されるように、影響力のある論文をどれだけ発表したか。すなわち、他者から引用される論文を発表することが重要です。加えて、国際的な研究コミュニティー（例えば国際専門誌の発刊や牽引）でリーダーシップを発揮することも大切です。ただし、独創的な研究を行うこととリーダーシップを発揮することを両立することは相当困難です。

それから、学術分野での歴史を作る作業にも貢献していく必要があります。わたしが最近耳にした言葉に「ゲームチェンジャー」というも

のがありますが、若い方にはぜひゲームチェンジャーになって欲しいと思います。また、研究者・技術者・建築家が実践しないと、若い方にいくら教育しても何も伝わりません。ぜひ世界へ挑戦していただきたいと思います。

◆大学院時代の重要性

わたしは、棚橋諒先生が 1935 年に発表された「速度・ポテンシャルエネルギー説」の再考に取り組んでいます。このような研究の原点は、大学院時代にありました。大学院の授業や研究室ゼミで学んだことを 35 年ほど悩んでいたのですが、2015 年に急にひらめいて研究を行い、世界的に高い評価を得るまでに至りました。

◆研究・教育で目指したこと

国際標準の研究とそれを生み出す教育を目指してきました。最近は、FD（ファカルティー・ディベロップメント）が推奨されていますが、ある程度をマスターすれば、そのあと研究者・教育者の人間力に依存するところが大きいと思います。また、よい研究者は多くの場合、よい教育者になる資質があると考えています。なぜなら、物事を多角的に見る研究力は教育でも活かせるはずだからです。

◆日本社会の問題点

大学で勉強、研究するインセンティブが十分に提供されていないと考えています。高進学率であること、キャリアパスが十分提供されていないこと、学位に関係なく初任給がほぼ横一線であることなどがあげられます。また、博士課程に進学する意味として、大学等の研究者枠が以前ほど十分には存在しないことも問題だと感じています。今後、社会システムを変えていく必要があると考えています。

◆これからの京大建築に期待すること

国際標準で、「原理」（設計では「スタイル」）を構築できる人材の創出を期待します。多くの人々の記憶に残るのは世界的な原理やスタイルを作り出した研究者・技術者・建築家です。材料の塑性域での安定性についての原理を発見・構築し、米国の National Medal of Science を受賞した研究者への追悼文の中で、He was one of the most informed（博識な）, the most fair（公正な）, the most tactful（機転のきく）, the most organized（計画的な）people I have ever known. という一文に、非常に心を動かされました。特に「公正な」という部分が重要で、真をついた研究しか歴史に残らないということです。

最後に、異なる文化・思考との遭遇のための留学・国際共同研究の重要性をあげておきます。さきほどの優秀修士論文賞や記念コンペの表彰はたいへん心強いと感じた次第です。若い方にはぜひがんばっていただきたいと思います。

３．エネルギーアグリカルチャーの時代に

ベテラン実務者の中から、環境設計を業とされておられる永田久子様に、「エネルギーアグリカルチャーの時代に」と題してご講演いただきました。

［要旨］

◆放牧時代（学生時代）の思い出

京都大学建築学科に学び、一番感謝していることは「放牧」してくれたことです。

わたしは体育会スキー部に 4 年間所属しており、毎年 12 月の半ばから合宿のため 100 日超の山籠もりする必要がありました。先生方には合宿前に課題を受け取っていただくなど、無理なお願いをお認めいただき、自由に伸び伸びと過ごすことができました。また、学術的にしっかりと指導いただける「納屋」があり、そこに集う「仲間たち」の同級生や「羊飼い」の先輩たちに刺激されて、雄大な山々に導かれるように、いつの間にか「環境設計」への道を歩み始めていました。

加えて、学生時代には、「バイオシェルター（エコロジカルな環境デザインを求めて）」や「第三の波」という本を読んで、エネルギーだけが化石燃料採掘に頼るような狩猟時代でよいわけがないと感じていました。これからは「エネルギーアグリカルチャーの時代だ！」と意を強くしていました。

◆無我夢中のものづくり

組織事務所に入社したのちは、質より量の業務を処理しなければならず、無我夢中でものづくりに励む中、学生時代の高い志は薄らぎかけていました。学生時代に培った体力のおかげで設計の物件数をこなすうちに、いつの間にか環境設計が見えてくるようになりました。感覚的には、土地が持つ文脈、人々の考え方、こどもたちの声に耳をすまして聞いていると、そこにふさわしいものがおぼろげながら見えてきて、環境設計はそれを掘り出してやればよいだけというような心境です。

◆エネルギーアグリカルチャー設計の実践

そのような中、岡山県真庭市のプロジェクトで、木質バイオマスによってエネルギーを生産する建物の設計に携わることになりました。ようやく、学生時代からの目標だった「エネルギーアグリカルチャー設計」に取り組むことができました。バイオマスエネルギーによって、一次エネルギーの消費を約 1/3 に抑えられました。

余談ではありますが、日本の歴史は木材と共にあり、江戸時代における 3000 万人の人口をバイオマスエネルギーで支えていた歴史があります。このことを考慮すると、バイオマスエネルギーはまだまだ高いポテンシャルを持っているのではないかと個人的には考えています。

◆組織事務所代表になって

オフィス代表となった現在、組織事務所として「皆さまに如何に貢献することができるのか？」を模索する日々です。

働き方改革としてダイバーシティ＆インクルージョンを目指し、時間的には裁量労働制や空間的にはフリーアドレスを取り入れました。また、SDGs 推進、共創を目標に掲げ、実際のプロジェクトにも取り入れています。

今後も皆さまと「共創」させていただき、「エネルギーアグリカルチャー」の理念を少しずつ前へ進めていけたらと願っています。

４．京大建築マインドで歩む行政建築家の道

行政職員の立場で建築に携わられている吉田純様に、「京大建築マインドで歩む行政建築家の道」というタイトルのご講演を賜りました。

［要旨］

◆わたしにとっての『京大建築』

京大を志した一番の理由は「自由の学風」に憧れたことです。学生時代、研究室で繰り広げられた多様な価値観を尊重し、自由に議論を行う光景はたいへん刺激的でした。自由な議論が、一人ではたどり着けない視点や気づきにつながることを日々の生活の中で実感できました。

また、建築とは、かたちのない思いを具現化するクリエイティブな営みです。その過程ではエンジニアリングだけでなく、生産・コスト、法令、感性・文化などが複合的に関連し、無数の選択肢があります。建築を学んだ者は、俯瞰的視野を持ちながら総合的な判断を行う訓練がなされていると考えています。

実際の物事は複合的で多面的で、答えは一つでないことがばかりです。このような現代で、京大と建築が掛け合わさった経験が、自分自身が歩んでいく力になっていると感じています。

◆地方公務員としての京大建築の展開・発展

京都市で勤務し始めたころ、建築行政職員を取り巻く状況がこれまでとは大きくかわり、さまざまな課題に直面していました。

10 年ほど前に、建築指導課で勤務していた際に、京都市建築審査会会長であった巽和夫先生とのご縁をいただきました。巽先生が提唱された「行政建築家」という概念を学び、建築行政に従事する地方自治体の職員の使命、可能性を知る機会を得ました。

のちに、この概念は布野修司先生の提起されている「タウンアーキテクト」にも通ずることを知りました。これらの概念に基づく議論が現在においても重要な意味を持つということは、我が国のまちづくりにおいて建築行政にまだまだ課題が多く、それらが難題であるということだろうと思います。

私自身が行政建築家たろうとして関わったチャレンジングなプロジェクトを 2 件紹介します。まず 1 件目は、歴史的建築物の保存活用のしくみづくりについてです。京町家や近代建築などを活用するため、増築や用途変更を行う場合においても建築基準法の遡及を受けないように、2012 年に全国で始めて条例を制定しました。条例の制定ができたのは、何が目的であるのか、何ができるのかなど、京大建築マインドで議論を重ねてきた成果だと感じています。

2 件目は、京都市京セラ美術館の再整備事業についてです。昭和 8 年にできた京都市美術館は現代のニーズに十分に応えられていないという課題を有しており、再整備を行うことになりました。このプロジェクトには、数多くの難題がありましたが、いずれも無事に乗り越えられました。立場や価値観の違いがある関係者を、われわれが行政建築家としてつなぐ役割を果たし、皆が最善を尽くした結果だと感じています。

◆京大建築マインドでチャレンジを

行政建築家への道に終わりはなく、一人一人が誇りをもって取り組んでいくことが重要です。自由な発想で自由に議論できる職場を作り上げ、社会的責任を自覚した上で挑戦し続ける集団を目指したいと思います。

後輩のみなさんには、自動販売機的な妄想に陥らずに、前提とされていることを疑って多くの方と議論することをお薦めします。ものづくりは十人十色で、主体的でありながらも独善的ではない自らの答えを出していくこと重要です。そのためには対話が必要だと思います。自分で天井を作らず、それぞれの場でがんばってください。

５．問いの大切さ

最後に、若手の建築設計者のホープとして大西麻貴様に、学生時代に京都で感じられた問いの大切さをご講演いただきました。

［要旨］

◆まちが大学

京都大学で学ぶ素晴らしさの一つは、京都というまちに暮らすことにあると思います。1 回生の初めての図学の授業で先生が窓の外をご覧になり「木々の緑が眩しいですね。君たちもこんなところへ座っていないで、まちへ出なさい」と仰ったことは忘れられません。そのとき、大学とはこのような場なのだと目が覚めたような気持ちになりました。大学というのは、自分のからだと心で、自分の意志をもって自由に学ぶ場所だということ感じました。

山々の美しさ、鴨川のおおらかさ、寺社を日常的に訪れる豊かさ、四季折々に根付く人々の暮らしに触れ、4 年間を過ごした経験は、建築を考え続ける上でかけがえのない時間だと感じています。それは、学生時代には意識的に感じていたことではなく、なにげない毎日の生活の中で徐々に蓄積していったものでした。

◆道のおもしろさ

京都で出会ったのは道のおもしろさです。街道から大路、小路、路地、さらには通り庭までさまざまな道が豊かに住みこなされており、まちから建築までを連続的に捉えることができます。都市史の授業で、道を軸に京都のまちの歴史をお話しいただいたこと、京都の奥とは空間的にも時間的にも奥だと仰ったことが心に残り、ひとつながりの空間の中にどのように距離以上の奥行きを生み出せるかを、設計する時にいつも思い出しています。

◆問いを大切にする

京都大学には多様な学科があり、それぞれに素晴らしい方々がいらして、それらがどこかで関係し合いながら大学全体の雰囲気と価値観を形作っているところだと考えています。建築を工学の分野だけで捉えるよりは、詩や文学、哲学、人類学といったさまざまな分野にまたがる形で、広く深く考えてみようとする姿勢があると思います。このように自然に感じるようになったのは、大学全体の歴史の厚みによるのではないかと思います。論理と感覚を対立的に捉えるというよりは一体で捉える姿勢、与えられた課題に答えるよりはなるべくはじまりに遡り、問いそのものを大切にする姿勢を、研究室での活動や設計課題、先生方や友人との対話を通し

て学びました。建築を考えることは、生きることそのものを考えることなのだ、という建築への信念、そして愛を教えていただいたことに、心から感謝しています。

６．討議

5 名のパネリストのご講演をふまえて、まずは、Zoom のチャット機能に寄せられた増渕昌利様（昭和 43）からのご質問について討議を行いました。

増渕：これからの公務員（地方公務員）にはどのような視点で、行政建築家の構想を伝えていけるとお考えですか。

吉田：大西さんもおっしゃっていましたが、対話が大切だと感じています。また、専門家にお願いすれば、自動的に解決してもらえると考えるのではなく、自分が当事者だと思って発信していって欲しいと思います。

続いて、神戸大学名誉教授の室崎益輝先生（昭和 42）、本会東京支部長で日建設計の川島克也様（昭和 54）、京都大学名誉教授の上谷宏二先生（昭和 45）の 3 名の方々から、貴重なコメントを賜りました。

室崎：わたしは、京都大学建築から多様な人材が次々とうまれてくる、すなわち人材の宝庫であることが魅力だと思います。ではなぜ、素晴らし人材がうまれてくるかというと、3 つの要素があると考えています。1 つめは、歴史や文化を大切にする文化的素養が豊かであること、2 つめは批判的精神、3 つめは創造的自由だと思います。今後もこの 3 つの要素を大切にしていって欲しいと願います。

永田：学生時代、京都のまちが健全な批判的精神と協調の精神の両方を持っていることに憧れて京都大学に入学しました。室崎先生のおっしゃるとおり、京都大学では、この両方の精神を持ち続けるべきだろうと思います。

川島：いま、産業革命以来、とてつもなく大きな変革の時代だと言われています。そういう時代こそ、広い意味でのデザインすることが重要だと思います。そのためには、多様さをどのように抱擁できるかが重要であり、多様な人材が集まってくる京都大学では、横断型で根幹的な議論や対話などを通じて、デザインしていく力の育成に尽力して欲しいと思います。そうすれば京都大学の未来は明るいのではないか感じています。

上谷：これまでわたしも大切にしてきたのですが、本質を追究する姿勢を持つということがたいへん重要だと思っています。具体的な心がけとしては、原理・原則に基づいて考察する、現場や実現象をよく観察する、常に「何故か」を問いかけて因果関係を探るという 3 点があげられます。先進的・画期的な業績の多くは、京大建築から生み出されています。これは学術のみならず技術の面でも実感しています。

パネリストからの話題のご提供、ならびにコメンテータからのメッセージを受けて、現役教授を代表して、計画系から三浦研先生（平成 5）、構造系から西山峰広先生（昭和 57）、環境系から小椋大輔先生の 3 名に、今後の京大建築の教育や研究についてお考えを拝聴しました。

三浦：本日の幅広く示唆に富む感性豊かなご講演を拝聴して、懐かしいとともに励まされ、京大建築は同窓生とともに作り上げていくべきだと実感しました。コロナ禍とはいえ、オンラインという新しい形式で大勢の同窓生に集まっていただくことができたというのは、わたしたちが新しい可能性を持ちつつあるのだと思います。京都という時代に流されにくい本質を問える立地は財産ですが、建築学分野は東京を中心にものすごいスピードで進んでおり、これがハンディとも言えます。しかし、オンラインでハンディをうめるチャンスになると感じています。京大建築の次の 100 年に向けて叱咤激励いただき、オンラインツールを使って、京大建築の教育や研究にご支援いただければと思います。

西山：わたしの専門は各種構造で、学生からは

木と鉄とコンクリートのうち、どの材料が良いかという質問を良く受けます。その都度、適材適所ですと答えています。これは学生にも当てはまりまして、学生も非常に多様ですので適材適所です。学生の能力に応じてうまく当てはめていって、褒めながら伸ばしていくという教育が重要だろうと思います。それから、もう 1 点、京大だからとか、京大建築だから、というのは良いところもあるとは思いますが、そういった枠に自分をはめてしまって、伸びを止めてしまわないで、自由な発想で進んでいって欲しいと思います。

小椋：恩師から受け継いで、今、わたしが考えていることをお話しします。建築とは建築以外の異なる分野の研究を取り込みつつ、建築において大事な理論・方法論を創出してきています。その理論・方法論は、建築以外の分野にも応用されており、その多くを京大が作ってきています。必ず未知の課題を見つけて取り組むこと、まずは教科書を疑うこと、何がわからないのか突き詰めて考えること、事実・課題に向き合うときに仮説を検証することなど、多くの重要な点を恩師から教えられました。時間に制約を受けずに議論できる仲間や環境が大切であり、京大建築にはそれが備わっていること実感しました。本日、改めて同窓生のみなさまの多くが同様の意識を持たれており、わたしが恩師から伝えられ、実践していることを変えずに進めていけることを確信しました。

最後に司会から以下のまとめを述べました。

聲高：3 名の現役教授からの決意表明をいただき、教員一同、次の 100 年に向けて尽力する気構えができた思いがいたします。私自身の考えを少し述べますと、学部入試に裏打ちされた高い能力を持つ学生が京大に入って、その土壌の中で出る杭になっても打たれない、むしろ自ら出る杭になり、「自由の学風」という空気を吸いながら成長します。そういう多様な学生を、日本さらには世界でトップクラスに立っておられる先生方が受け入れて、知恵と知識を受け渡す「共育」を行っています。このような流れが 100 年間の歴史の中で培われてきたのだと思います。この 100 年間の歴史を、次の 100 年に続けていくのが、われわれに課された使命だろうと思います。

さまざまな場面で京大建築会のみなさまと連携して、京大建築の財産を育てていく決意をいたしまして本シンポジウムのまとめとさせていただきます。

7．追記

パネリストやコメンテータの方々からいただいたメッセージは、ぜひ今後の教育・研究に役立てたいと思います。オンライン開催だったため、聴講されたみなさまの反応や感想を伺うことができませんでしたが、大勢のみなさまにご聴講いただけたことは、運営サイドとしてたいへん満足しております。ただし、司会の不手際で、予定の時間を大幅に超過してしまい、ご聴講くださったみなさまにはご迷惑をおかけしました。

また、Zoom のチャット機能でお寄せいただいたご質問は、時間の都合上、誠に失礼ながら割愛させていただきました。以下に記載させていただきます。

岸元孝之（平成 8）：吉田様から行政建築家としての大切な役割を伺ったと思います。一方で全国一律の法令が一定の安全性を確保する反面、地域の建築の特性や街並みを阻害しかねない可能性があると思いますが、建築法令等に関する指導行政に組織として今後どのような役割を期待されるか、建築を学んだ技術者がどんな気概を持つべきかを、京大建築で学んだ観点で教えていただけますでしょうか。

その他にも、Zoom のチャット機能でメッセージをいただきました。一部を掲載いたします。

戸田光学（昭和 57）：西山先生、褒めて育てる、セクト主義に陥らない、先生の姿勢に感銘！上谷先生の原理原則、現場主義、因果関係。そのとおりと思います。

衛藤照夫（昭和 49）：本日の催しは本当に素晴らしい贈り物でした。運営及びパネルディスカッションを頂いた皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。

谷口昌利（昭和 63）：本日はありがとうございました。盛り沢山でしたが久々に有意義な時間で、学生に戻ったように楽しく拝聴しました。

塩月成則：他学部卒ですがお世話になりました。大変刺激を受けました。京大マインドを忘れずに医療分野でも頑張っていきたいと思います。

病院環境と建築を将来的には考える必要があると思います。その折は、本日感銘を受けた大西先生に相談したく思います。この度はありがとうございました。

岸元孝之（平成 8）：25 年前に吉田キャンパスを巣立ち、社会への第一歩を踏み出した日を思い出しました。京大建築の先輩方、同窓生の方々の話を伺い、激動の時代に流されずに学んだことを胸にがんばります！本日は有難うございました。

数多くの温かいメッセージをいただき、運営サイドとして感謝申し上げる次第です。今後とも、京大建築学教室の教育・研究にご支援賜りますようにお願い申し上げます。